

一般の間には、カンボヂアの森林に眠つてゐる神秘の町について、奇異な考が行はれて居たのである。其の有様は、長廊を構へ、石の高塔が聳えてゐる、莊重な建物のある周圍には藁の伏屋を見、宏壯の建築で窺はれる進んだ文明を偲ぶ傍に、現在の住民が、唯之等が滅びゆくものとしてゐる其無能を考へ、其の對象の餘りに甚しいには、何人も過去と現在との間に連続があると思へない程である。文字のあるカンボヂア人の許してゐる様に、凡て之等の建物は一夜の中に偉才が造つたのであるとする事は出来なかつたので、之を架空的な古代になつたものとするに至つたのである。而して、多く之をば、如何なる歴史的變動に依つての事か知れないが太古に滅亡した民族に歸し、アンコールは、同時にこの民族の作品であり、其の墳墓であらうとしてゐたのである。

斯くカンボヂアの古い歴史の事に入つて行つて、之等の遺跡を取巻いてゐる二重の緑なす城壁の間に僅かに残つてゐる跡形を傳ひ、又古都が死衣を纏うて横つてゐる樹々の繁つてゐる下を辛くも辿つて見れば、之等の建物と森